

VI. JAPEXに関するQ&A

公益財団法人日本郵趣協会

1 出品申込と出品物の取り扱い

Q1 :
初めてJAPEXに応募しようと考えていますが、どのようなことに注意すればよいですか？

A1 :
最初に、JAPEX一般規則と展覧会毎に定めるJAPEX特別規則をよくお読みください。ここには、出品物に関する重要な事項が網羅されています。リーフに保護ラップをつけることも忘れないでください(一般規則第22条)。出品物の出品申込から返却までの流れは、特別規則の最後にまとめていますので参考にしてください。

Q2 :
出品物の保険はどうなっていますか？

A2 :
搬入された出品物は、会期前及び返却までの期間、当協会事務局の耐火金庫で保管しますが、会期中は保険をかけていません。
従いまして、出品物の保険は出品者個人で保険会社とのご契約をお願いいたします。

Q3 :
出品物が展示されないこともありますか？
また、その場合の出品料はどうなりますか？

A3 :
1次審査において、49点以下の場合にはJAPEX会場に出品物は展示されません。その場合でも、審査及び事務手続きを行っていますので、出品料は返却されません。

Q4 :
日本郵趣協会の会員ではありませんが、JAPEXに応募できますか？

A4 :
当協会の会員でなくても、居住地及び国籍等を含め一切制限なく応募できます。また、オープン・クラスには、グループによる応募も可能です。
また、当協会の維持会員、正会員は、出品料の割引特典を受けることができます。

Q5 :
出品物は、リーフでなくてはいけないのですか。

A5 :
出品物は、リーフを使用してください。規定のサイズであれば、既製品でも自家製品でもかまいません。
ただし、出品物の安全確保のため、ある程度の厚みのある(5mm以内、ただし下辺10mmは1mm以内)リーフを用いてください。また、リーフは展示できる状態で応募してください。差し込み等の作業が必要なリーフは受付できません。

Q6 :
イントロダクトリーページ(タイトルページ)とはどのようなものですか？ ないと減点されるのですか？

A6 :
イントロダクトリーページ(タイトルページ)とは、出品物のプラン、内容の概要、まとめ方の考え方や注目してほしいマテリアルをまとめて記載するもので非常に重要なページです。審査員はまずイントロダクトリーページ(タイトルページ)を見ますし、参観者にとっても、出品物の内容を把握するためのページとなります。
イントロダクトリーページ(タイトルページ)の提出はJAPEX一般規則で義務付けられていますので、提出がない場合には、3点の減点となります。
イントロダクトリーページ(タイトルページ)は必ず作成し、出品申込時に画像またはコピーを必ず添付して提出ください。事前指導制度(出品コンサルティング)を利用して、審査員にアドバイスをもらうこともできます。→ Q14 参照

Q7 :
シノプシスとはどのようなものでしょうか。

A7 :
シノプシスとは、審査の参考情報として出品申込書と一緒に任意で提出できるもので、イントロダクトリーページ(タイトルページ)やリーフに書くことのできない審査員へのアピールポイントをA4判1ページにまとめてください。例えば、前回の切手展応募時からの改善点や作品構成の変更点、新たな研究成果などです。
また、ぜひ着目してほしいマテリアルがある場合には、その理由の概略を記載し、画像またはコピーを添付して提出することもできます。シノプシスは、審査の参考にするもので公式ガイドブック等で公表はいたしません。
また、出品物に対する思いなどを書いていただいても結構です。形式は自由ですが、写真や図版を取り入れると分かりやすくなります。

Q8 :
出品物は自分で展示や撤去ができますか？

A8 :
出品物の展示と撤去は、JAPEX実行委員会が行いますので、出品者が行うことはできません。ただし、非競争出品部門の出品物はその限りではありません。

Q9 :
出品物の写真撮影があると聞きましたが、断ることはできますか？

A9 :
特に優れ、多くの人の作品作りの参考にしていただきたい出品物や、特に注目し記録として残しておきたいマテリアルは、月刊誌『郵趣』及びJAPEX出版物等への掲載に使用することがあります。日本の郵便切手文化の発展と水準高度化のために、ご理解ください。
なお、これらの出版物に関する著作権等は日本郵趣協会

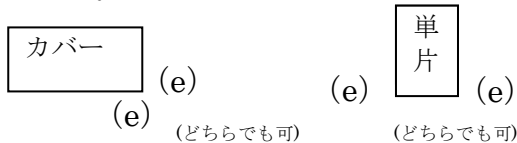
にあることもご理解ください。

Q10 :
出品物の返却はどうなりますか？

A10 :
出品物の返却は、JAPEX終了後、出品者が出品申込書に記載された方法で行います。
賞状や審査員による審査評、記念品等の準備及び写真撮影等の所要の手続きを経て速やかに(約1~2週間後)返却いたしますが、会場受取を希望する場合には、賞状や審査評、記念品は後日のお届けとなります。
ただし、文献クラスの出品物は、返却せず切手の博物館に寄贈され、郵便切手文化の普及に役立たせていただきます。

Q11 :
鑑定書のあるマテリアルを使用しようと思いが、どのようなことに注意すればよいですか？

A11 :
鑑定書は現物か原寸大のカラーコピー(裏面を含む全ページ)を、リーフの裏側と保護ラップの間に入れておいてください。鑑定書のコピーの枚数が多いときは、透明な袋に収めてリーフの裏面に貼り付けると良いと思います。
次に、リーフ表面への表示方法として、下図のように(e)とマテリアルの直近に8~10ポイント程度のサイズで、記入してください。



カバーの場合は(e)と記載するスペースは十分取れるので、マテリアルの真下または右下横が良いでしょう。単片が並んでいる場合、それも各単片の下に書き込みのある場合はマテリアルの左右でも結構です。要はどの単片に鑑定書が付いているのかが、明確に、かつ美観を損なわないで表示されていれば良いのです。

Q12 :
カバーの裏面やカバーの消印を抜き出して示したいのですが、カラーコピーでない駄目ですか？

A12 :
リーフにカバーの裏面や消印の図を示す場合、カラーコピーでも白黒コピーでもスキャナーで取り込んだ図でもかまいません。ただし、最近のコピーやスキャナーの性能が良くなっているので、これらの図を入れる場合、オリジナルのマテリアルとの相違が審査員や参観者にとって分かりやすく示すことが大切です。これができていない場合には、展示技術(プレゼンテーション)の評価が低くなってしまいます。そのため、JAPEX審査員会では、縮小コピーすることを奨めます。
また、図の横には倍率を付記してください。縮小の倍率については、厳密に何%という決まりはありませんが、リーフの美観を十分に考慮して、大き過ぎず、かつ小さ過ぎない倍率を決めていただければ結構ですが、一般的なカバー、葉書の場合、70%程度を推奨します。
カラー、白黒のどちらの場合でも、リーフの美観を損ねず、なおかつコピーとオリジナルの区別を明瞭にすることが、コピーを用いる際の大原則になります。

Q13 :
出品物のカバーの宛名は、隠さなくてもよいですか？個人情報とのからみはどうなりますか？

A13 :
結論からいえば、出品物のカバー類の宛名を隠す必要はありません。というよりも、宛名を隠すことは審査では減点要因になる場合もありますのでご注意ください。
個人情報保護と宛名の関係は、出品者の間でも誤解が多いのですが、正当に譲渡され研究対象として市場から入手されたカバーは、基本的に宛名を隠さずとも特に法律的に問題はありません(*)。
ただし、葉書などの文面や監獄郵便などは、ごく例外的に個人情報保護の観点から問題になるケースがないとも言いきれませんので、トラブルが予想される場合はご注意ください。
どうしても展示すると問題があると出品者が判断した場合は、そのカバー自体の展示を自主的に止めていただかなければなりません。いずれの場合も、特定のカバーを明示するかどうかの判断は常に出品者に任せられています。

(*) 個人情報保護法の規制対象は、企業・団体が集めた住所・氏名等の個人情報を当事者に無断で外部に流出させることであり、通常の私信は規制の対象外です。信書は投函された時点で名宛人の所有物となり、名宛人が了解している限りにおいて、その取扱いは名宛人の自由です。名宛人がその信書を他人に譲渡した場合は、信書の所有権は別の人物に移転し、その取扱いは新しい所有者の自由です。従って、切手商やオークション等で購入または知人から譲り受けたカバーは、正当な手続きを経て現所有者にあるため、それを公開することは法律上、全く問題はありません。仮に、元の所有者が不正な手段で持ち出したカバーであっても、それを“善意の第三者”として入手した現所有者が責任を問われることは法律上あり得ません。ただし、個人情報保護法の施行(2004年4月)以降、企業・団体宛に個人が差し出した郵便物を不正に持ち出し、出品物として公開する場合には、同法に抵触する可能性がありますのでご注意ください。

Q14 :
事前に出品物についてアドバイスがもらえると聞きましたが、どうすればよいですか？

A14 :
当協会では、出品者(特に新規出品者)の作品作りのアドバイスを出品事前指導制度(出品コンサルティング)を無料で行っています。予約していただいたうえで、全国郵趣大会(例年9月)、または当協会に出品物を持参していただくと、クラス担当の公認審査員により作品作りについての指導が受けられる制度です。また、出品物のコピーを当協会に送っていただき、公認審査員に添削を依頼する方法もあります。
詳しくは、当協会事務局にお問い合わせください。

Q15 :
審査員に出品物についての批評を直接聞けるそうですが、どうすればよいですか？

A15 :
クリティーク(審査員と出品者との対話)は、出品者が当該出品物に関して直接、担当審査員から個別に(出品者の

承諾を得て第三者が傍聴することも可)評価を受け、改善点などについて助言を受ける機会です。

希望者には、クリティーク(審査員と出品者との対話)の機会をJAPEX最終日の午前中に設けています。希望する場合には、あらかじめ出品申込書にその旨を記載してください。また、複数の出品物を応募している場合には、クリティーク(審査員と出品者の対話)を希望する出品クラスを記載してください。

2 伝統郵趣クラス

Q16 :
伝統郵趣とはどのような研究分野なのでしょうか？

A16 :

伝統郵趣とは、切手または葉書などのステーショナリーそのものを研究する分野を指します。伝統郵趣には、切手やステーショナリーの発行目的、製造面、使用例、郵便制度など、郵趣研究のあらゆる要素が含まれます。伝統郵趣の分野は、これらの要素がバランスよく構成されることが求められます。

かつては、研究発表＝伝統郵趣でしたが、近年は使用例を中心に研究したり、郵便制度を表現する郵便物を研究したり、郵便印を研究したりと、様々な研究スタイルに分化しました。このため、古くからの研究方法を伝統郵趣と呼び、郵便制度の変遷を郵便物で表現する郵便史や、切手の図案などを使い、特定のテーマを表現するテーマティックなどと区別しています。したがって、伝統郵趣という言葉は、切手やステーショナリーを製造面や使用例などの観点からバランスよく研究していれば、古い切手の研究だけではなく、現行切手研究にも用いられます。

Q.17 :
伝統郵趣のコレクションでは、古い切手ほど高い評価を受けている印象を受けます。新しい切手では、高い賞は望めないのでしょうか？

A.17 :

必ずしも、古い切手が高い評価を得て、新しい切手の評価が低いということはありません。伝統郵趣の評価は、①主題の選定、構成/展開(30点)、②郵趣知識と研究(35点)、③状態と希少性(30点)、④展示技術(5点)の4項目100点満点で行われます。

一般的には、①の中の主題の選定(15点相当)、③の中の希少性(15点相当)において、古い切手の方が新しい切手よりも高くなる傾向があります。しかし、きちんとしたテーマ設定をしていれば、その差は限定的です。

Q18 :
JAPEXへの応募を考えていますが、自分の出品物がどの出品クラスとして応募すれば良いかの判断ができません。どうすれば良いのでしょうか？

A18 :

どのクラスに応募するか決めることは、JAPEXに限らず、どの展覧会でも最も重要なことの1つです。

JAPEX審査基準を参照していただき、さらに必要があれば、出品事前指導制度(出品コンサルティング)などを利用して理解を深めてください。なお、どの出品クラスにも属さない出品物は、伝統郵趣として審査します。

なぜならば、伝統郵趣は、郵趣研究全般を網羅するカテゴリだからです。出品クラスが分からない場合は、伝統郵趣に応募ください。ただし、審査の段階で他の出品クラスとして審査する方がより高い評価を受けると審査員が判断した場合には、出品クラスを変更して審査することがあります。

Q19 :
伝統郵趣の出品物を作る場合、例えば「戦後の日本普通切手」のような広い範囲を網羅的に構成する出品物と、「大正毛紙」のような狭い範囲を深く掘り下げる出品物では、どちらが良いのでしょうか？

A19 :

出品物は、限られたスペースの中で過不足なくコレクションを構成する必要があります。狭すぎる研究範囲の切手を多くのフレームで構成すると冗長となり、逆に、広すぎる研究範囲の切手を構成すると希薄な内容となります。

すなわち、適度な範囲を選ぶ必要があります。日本の普通切手で広い範囲であれば、日専の大分類である「手彫切手」「小判切手」「菊切手」「田沢切手」といった範囲、狭い範囲であれば、その下の分類である「旧小判切手」「旧大正毛紙切手」程度が、数フレームの出品物を構成する場合の範囲の目安と思えば良いでしょう。

一般論として、広い範囲を扱った出品物は、狭い範囲の出品物に比べてインパクトで高い評価を得やすいですが、トリートメント(ストーリー展開)が難しくなります。

Q20 :
いわゆる満月印(単片切手に消印が真ん中に押されたもの)を中心に集めています。しかし、満月印の押された切手を並べても伝統郵趣の出品物としてはふさわしくないと聞きました。本当でしょうか？

A20 :

伝統郵趣のコレクションは、切手発行の経緯、印刷や目打などの製造面、使用例がバランスよく構成されていることが求められます。

満月印の押された単片切手は、使用例の限られた要素となりますので、出品物にこれらが含まれていることは問題ありません。しかし、満月印であることが出品物の主張を深める場合でなければ、多くのリーフを使って表現すべきではありません。

Q21 :
タイの切手を研究していて応募を考えているのですが、公認審査員会にはタイ切手の専門家がおられないようです。たとえ応募したとしても、果たして自分の出品物が正当に評価されるか否か、大いに不安があります。

A21 :

確かに現在の公認審査員には、タイ切手を専門的に研究しているメンバーはいません。しかし、そのことをもって、タイ切手コレクションの審査ができないと考えないでください。伝統郵趣や郵便史の場合、いかなる時代のいかなる国や地域を対象としたものであっても、全体の構成やバランス、プレゼンテーション等について、共通の土壌で判断できる部分が少なくありません。

審査員会では、なじみの薄い主題のコレクションの応募が明らかになると、直ちに各種の文献を調査するなど、できる限りコレクションのポイントを把握することに努めています。

また、公認審査員は少なくとも2~3年に一度は海外の国際切手展を視察し、主要な国や地域のコレクションについて常に最新の研究情報を入手するように心がけており、そうして蓄積された知識を活用しています。さらに、詳しい専門家の知見を求めるほか、専門家を招聘しての郵趣セミナーも開催しています。

主題の重要性や作品としてのオリジナリティが適切に表現されていれば、審査員会はそうした部分を適正に判断して最大限の努力を払います。

そのため、JAPEX委員会では出品申込において出品物全体の構成がわかるイントロダクトページ(タイトルページ)の画像またはコピーを添付するようにお願いをしています。JAPEX委員会は、常に新たな専門分野に挑戦する研究発表を歓迎いたします。

3 郵便史クラス

Q22 :

「郵便史」がコレクションになるというのはどういうことなのでしょう。古文書や写真史料を研究することなのでしょうか？

A22 :

郵便史コレクションの詳細については、JAPEX審査基準をお読みいただくとして、簡単にご説明します。

郵便史コレクションとは、実際に郵便で運ばれた郵便物を用いて、①郵便料金、②郵便経路、③郵便印などの郵便事業に関わるさまざまな要素を読み解き、ある特定の時期の郵便事業、地域の歴史を、体系的に説明・展開したコレクションのことです。こういった要素を説明できるマテリアルは、実通(実際に郵便で運ばれた)カバーということになりますので、郵便に関する材料で構成することが求められます。他の出品クラスと同様、研究分野の1つと理解してください。

歴史的に重要な古文書や写真史料などを全体の半分まで用いることができるのはオープン・クラスとなりますので、そちらをご覧ください。

Q23 :

郵便史コレクションでは、未使用の切手を使用すると減点されると聞きました。なぜですか？

A23 :

未使用切手は、その切手が印刷されたという事実を示すことはできますが、郵便に使用されたという事実を示すことはできません。従って、いかに高価な切手であっても郵便史コレクションに未使用切手を使用することは、一般的に適当であるとは言えません。

ただし、例えば「琉球郵便史」といった出品物の場合、久米島切手のような、カバーの現存例がないまたは入手することが事実上不可能で、かつ切手自体に郵便史的意義がある場合には、未使用切手の使用も可能と考えます。

Q24 :

郵便史コレクションの研究方法について、もう少し具体的に説明してください。

A24 :

郵便史コレクションにおいては、テーマの選定、設定が非常に重要な意味を持ちます。

最近の切手展で見られる郵便史コレクションとして、大きく三つの体系があるように思います。一番目は、「軍事郵便史」「速達郵便史」のように特定の郵便制度について、制度の変遷や料金の変遷を展開したコレクションで、二番目は、「郵便規則時代の郵便」「第二次世界大戦中の郵便」といった特定の期間の郵便制度や消印などを展開したコレクションです。そして三番目は「東京市内郵便史」「大阪局郵便史」といったように、特定の地域、郵便局の歴史を展開したコレクションです。それぞれについて、基本的な展開方法と少しでも高い評価が得られるための注意点をまとめます。

1番目のコレクションですが、例えば速達郵便史の場合、まず料金の変遷が軸になりますので、料金の変遷とそれに応じたマテリアルが揃っている必要があります。しかし、それだけでは充分とは言えません。料金の変遷だけでは速達制度の取扱い方法の変遷や、速達郵便開始から全国展開されるまでの取扱地域の拡大が表現できませんし、速達郵便と関連した別配達や別仕立といった制度も入れないと、速達郵便自体の説明としては不十分となるでしょう。反対に、そういったマテリアルを入れることにより出品物全体のインポートランスや希少性が高くなり、評価を高くすることができます。

2番目の例で説明しますと、まずは基本として、テーマとなっている特定の期間の様々な郵便制度と料金に関するマテリアルを揃える必要があります。また、消印に変化があればそれも説明することが必要となる場合もあります。さらに、特に戦前であれば占領地も含めた地域、経路の説明をしなければならぬ場合もあります。

すなわち、特定の期間の郵便史コレクションの3要素(①郵便料金、②郵便経路、③郵便印)をいかに説明できているかが重要なポイントになります。限られたリーフ数の中で、いかにバランス良く全体を構成するか、構想力が求められるコレクションと言え、そういったことができているコレクションは当然高い評価となります。

3番目の例で説明します。よく見られる例で、消印の変遷だけのコレクションでありながら、「〇〇局の郵便史」といったタイトルを付けているコレクションがあります。郵便史のコレクションでは、郵便史の3要素がいかに説明されているがポイントです。

地域・郵便局郵便史の場合、3つの要素のうち郵便経路、郵便印の要素がより高くなり、これらがどのように説明されているかが高得点獲得のためのポイントになります。地域内の郵便通送がどのように変化したのか、郵便局が国内の郵便通送にどのような役割を果たしたのか、外国郵便交換局であれば、日本と世界の関係の中で、郵便通送においてどのような役割を果たしたのか。さらに、その流れの中で消印はどのように変化したのか。といった要素がきちんと説明されている必要があり、そのようなコレクションは高い評価となります。

地域の消印のコレクション、消印の変遷だけのコレクションはマルコフィリーとなり、郵便史では審査しません。

いずれにしても、郵便史コレクションは、テーマを決め、主に実通カバーを用いて、郵便史の3要素(①郵便料金、②郵便経路、③郵便印)を考慮しながら、いかにテーマに沿った展開をしていくかということがポイントとなります。そのため、カタログや参考文献だけでなく、告示、通達など関連する官報を調べるなど深い知識研究が求められるほか、テーマに沿ったコレクションをいかに構成していくか、マテリアルを選ぶかといった、構想力、創造力も求められます。

テーマを狭い範囲に絞ればコレクションは構成しやすくなりますが、インポートランスが下がり、希少性においてないものが目立つといったデメリットがでてきます。反対に、テーマを広くすれば構成は難しくなりますが、郵便史の3要素をうまく活用していけば、インポートランス、希少性を上げていくことができます。

最初に、テーマの選定が重要だと説明したのは、こういうことを意味します。良くご検討のうえ、コレクションを作ってください。

Q25 :

カバーを中心に日本の歴史を展開した出品物を応募したいのですが、テーマティック・クラスと郵便史クラスのどちらに応募するのが適切ですか？

A25 :

インフラとしての郵便事業という観点から、日本の発展に伴い郵便事業がどのように変化したか、或いは郵便事業が日本の発展にどのように寄与したかといったテーマのコレクションが出てきています。そのような出品物は、ストーリーを作って「プラン」を明示、それに従い理論的に展開するということではテーマティックのスタイルですが、内容は郵便史に近く、どちらのクラスで応募するのがいいのか問題となります。

JAPEXでは、このようなコレクションが応募された場合、出品クラス変更を行い、その他クラスとして取り扱いますが、採点は、出品者の不利益にならないように両方のクラスで行い、点数の高い方で賞を決定しています。しかし、例えば宛先や差出人などの要素は、余程の歴史的意義がない限り、郵便史でもテーマティックでも評価の要素にはなりませんので、どうしても不利益が出てくることは否めません。そういったことをご理解いただき、出品クラスの変更も行われることもご認識のうえ、出品クラスを決定してください。

4 テーマティック・クラス

Q26 :

例えば、「野生動物の保護」というタイトルのテーマティック・クラスの出品物において、昨年の上野動物園差し出しのカバーを用いることが容認されますか？

A26 :

まず、大前提としてテーマティック・コレクションは、正統な郵趣品を用いてテーマ展開する必要があります。正統な郵趣品の基準は、JAPEX審査基準の規定に準じます。ただし印紙は、ストーリー展開上、印紙以外の郵趣品がなく、かつ重要なストーリー展開に用いる場合の例外を除き、郵便使用の印紙のみ(カバー)使用することが可能です。

「カバーに記載された差出人や受取人」をテーマ展開に用いることは、FIP審査基準では正統な郵趣品として規定されていません。したがって、JAPEXではカバーの希少性が高かったとしても、正統な郵趣品ではないため、「状態と希少性」の面において審査対象から除外されます。

また、これらのカバーが濫用されている場合は、「郵趣知識」の面において減点対象となる恐れがあります。なお、テーマ展開において「カバー等の差出人もしくは受取人」がテーマの要素として極めて重要な意義を持ち、かつ正統な郵趣品が存在しない場合には、FIP見解を踏まえてJAPEXでは展示を推奨していません。

なお、カバーの差出人が、公人や公的機関など無償で郵便を差し出す特権がある場合において、カバーに公的な証示印が押印されている場合には、その証示印をもって正統な郵趣品として明示することが可能です。

Q27 :

友人から、「カシエの描かれた FDC は、切手と消印の部分だけを示すように」と言われたのですが、本当ですか？また、「実郵便であれば、カシエの描かれた FDC でも、カバー全体を展示できる」と言われたのですが、なぜでしょうか？

A27 :

国内では、カシエとは、FDCの余白部に印刷された絵を意味することが多いですが、非実通カバーの私製印刷のカシエ(郵政がFDC等記念カバーの制作を目的として郵趣家向けに提供した封筒のカシエも含む)でしたら、カシエ部分は審査の際に郵趣品として認識されません。

カシエは、テーマティックに用いられる正統な郵趣品でないため、不必要な空白と認識されます。この場合、ウインドウ(リーフに穴をあけ、カバーに押印された記念印の部分など必要部分のみが表面に出る状態にする展示手法)を使って、封筒のうち、切手と消印の部分だけが見えるように構成することが好ましいです。これにより、各マテリアルを最小限のスペースで展示できるので、他のマテリアルのためのスペースが生まれて、ストーリーを密度濃く展開できるからです。

また、実郵便の場合にはカバー全体の展示は正統な郵趣品を展示する意味で差し支えありません。むしろカバーの一部分のみの構成は、破損や汚損などの欠点を隠していると認識される場合があり、好ましくありません。

ただし、カシエ付の実郵便は一般に、意図的に郵趣目的で作成されたものであると思われるため、高い希少性がない限りは、濫用は避けることが望ましいです。また、カシエ部分をテーマ展開に使うことは、非実通便同様にFIPテーマティックの審査基準では認められていませんのでご注意ください。

なお、カシエのような図案が描かれた封筒であっても、ステーションナリー(官製はがきや切手付封筒など)の場合には、正統な郵趣品の一部であるためストーリー展開に使うことは差し支えありません。

Q28 :

先輩から、テーマティックの出品物で、マキシマム・カードの多用は避けるべきと言われたのですが、どのような場合なら、使って良いのですか？

A28 :

まず、マキシマム・カードの定義ですが、FIPマキシマムフリーの審査基準(SREV)に準拠します。端的には、切手の主題を強調するような図案を描いた絵はがき(絵が描かれた面)に、切手の主題や発行目的と関連のある消印が、切手に押印されている状態のマテリアルをマキシマム・カードと定義しています。

この定義において、マキシマム・カードの図案は私製印刷であってもテーマ展開に使えますが、ごく少数に限るべきであることがFIPテーマティックの審査基準で規定されています。なぜなら、マキシマム・カード自体は私製印刷物であり、正統な郵趣品によってストーリーを展開するテーマティックにおいては、スペースの無駄遣いとみなされるからです。

また、テーマティックでマキシマム・カードを用いる場合は、単に切手そのものの拡大図ではなく、切手の図案に描かれた部分図の全体像を示す場合(例: 絵画の部分図の切手と、絵画の全体像のカード)や、切手と関連のある図案を示す場合(例: 成鳥の図案の切手と、ひな鳥の図柄のカード)など、ストーリー展開上重要な場面で、切手図案の情報を補強する目的に限って、ごく少数(2フレーム以上の作品で2~3点程度)の展示に限るべきです。

さらに、テーマティックで用いられるマキシマム・カードの消印は、テーマに関連のある図案や文言の消印であるべきことも、上述の審査基準で規定されています。

なお、肉眼では細かくて分かりづらい図案については、郵趣品の展示を圧倒しない程度において、図案の拡大図を用いて示すことが奨励されます。特にハイレベルな作品を目指すにあたっては、マキシマム・カードの使用を極力避けるべきであると思われますし、実際、FIP国際切手展の上位作品での使用は、FIP審査基準に則り極めて少ないのが実情です。

5 ユース・クラス

Q29 :

伝統郵趣(でんとうゆうしゅ)、テーマティックとは、それぞれどんなクラスですか？

A29 :

伝統郵趣(でんとうゆうしゅ)とは、おもにひとつの国のひとつの時代に発行された切手を、なるべくたくさん種類をあつめて、展示する方法です。どこの国で、どんな切手が発行されているかを知るためには、「さくら日本切手カタログ」などが便利です。

テーマティックとは、なにか、ひとつ自分が考えていることや伝えたいこと(テーマ)を決めて、切手をつかった物語として作品をまとめる方法です。絵本でいえば、切手が絵のかわりになっており、その上や下に物語となる文章を書きこまれることで、作品をみるひとは、絵本のように物語を読みすすめていくことができます。

Q30 :

作品は、どうやって作ればよいのですか？

A30 :

作品作りは、自分が好きな作品を、見よう見まねで作ってみるのが、意外と近道です。

また、作品づくりを教えてくれる人を探すのは、とてもよいことです。JAPEXをひらいている日本郵趣協会(にほんゆうしゅきょうかい)にお問い合わせください。あなたの近所で、作品づくりを教えてくれる、おじさんやおばさん、お兄さんやお姉さんを、紹介(しょうかい)してもらえませんか。

※日本郵趣協会(にほんゆうしゅきょうかい)事務局(じむきょく)(info@yushu.or.jp)にお問い合わせください。

Q31 :

どういう作品をつくと、よい賞をもらえるのですか？

A31 :

伝統郵趣とテーマティックの場合でちがいます。また、仮に、まったく同じ作品であったとしても、作った人が小学生か大学生かで、評価がちがいますので、ご注意ください。

1・伝統郵趣(でんとうゆうしゅ)の場合

a.構成(展示ぜんたいの流れ)

切手が、すじ道だって、並べられているかどうか、また、集めている切手が、収集家の中で、どれだけ重要度が高い切手なのかの評価されます。この場合のすじ道とは、カタログなどによっている分類や順序(じゅんじょ)が、ひとつの例としてあげられます。

また、「プラン」があることも重要です。プランとは、本のもくじのようなページです。作品の最初に1ページ必要です。もくじを見ると、本のあらすじが想像できるように、プランを見て、展示する作品の内容が簡単にわかると、よいプランという評価になります。

b.知識(ちしき)

切手が、いつどこでどのような目的で発行されたのか?、印刷の方法、消印(けしいん)の種類といったことがくわしく、正しく、それでいて、わかりやすく書かれているほど高い評価になります。

これらの知識は、せんもんの本を読まないといけないものが多いです。そのような本は、ふつうの本屋さんでは売っておらず、切手屋さんなどにおいてある場合があります。

また、集めている切手について、自分で研究しながら、売られているカタログよりも詳しい内容で、自分なりのカタログを作る人もいます。このような研究は、高く評価されます。

c.材料(マテリアル)

作品にはらわれている切手や郵便物などを材料(マテリアル)といいます。展示(てんじ)されている切手にキズやシミがなかったり、消印に書いてある文字が読みやすかったりすると、よい評価になります。

作品にはらわれている切手や郵便物などをマテリアルといいます。切手だけの作品よりも、郵便物がふくまれていたり、普通郵便よりも書留(かきとめ)郵便、ありふれた消印より、めずらしい消印など、きょうみ深い郵便物を展示していたりすると高い評価になります。ただし、趣味のために差し出したものより、必要におうじて差し出された郵便物の方が高い評価になります。

各リーフは、プランに沿った内容だけを示すようにします。

d.展示(てんじ)

切手がきれいに並べられていたり、文字がていねいに書いてあったり、図やグラフをつかって、わかりやすく書いてあるほど高い評価になります。

2・テーマティックの場合

a.テーマティック作品としての構成(全体の流れ)

作品のタイトルが、作品の内容を正しく示していると良い評価になります。たとえば、「鉄道」というタイトルの作品で、かもつ列車だけを取り上げていけば、正しいタイトルとは言えません。

また、「プラン」があることも重要です。プランとは、本のもくじのようなページです。作品の最初に1ページ必要です。もくじを見ると、本のあらすじが想像できるように、プランを見て、物語のあらすじがわかると、よいプランという評価になります。

作品の各ページの書きこみは、物語として、お話がわかりやすく、つながっているほど、高い評価になります。

b.知識(ちしき)

知識には2種類あります。1つ目としてテーマについての知識が、くわしく書かれていると高い評価になります。ただし、切手の展示なしに知識だけがたくさん書きこみとして、書かれていても高い評価につながりません。

2つ目は、切手についての知識として、いつどこでどのような目的で発行されたのか?印刷の方法、消印の種類と

いったことが、くわしく、正しく、それでいて、わかりやすく書かれているほど高い評価になります。

c.材料(マテリアル)

作品にはらわれている切手や郵便物などを材料(マテリアル)といいます。展示(てんじ)されている切手にキズやシミがなかったり、消印に書いてある文字が読みやすかったりすると、よい評価になります。

また、切手だけの作品よりも、郵便物が含まれていたり、普通郵便よりも書留郵便、ありふれた消印より珍しい消印など、きょうみ深い郵便物を展示していたりすると高い評価になります。

d.展示(てんじ)

切手がきれいに並べられていたり、文字がていねいに書いてあったり、地図や図をつかって、わかりやすく書いてあるほど高い評価になります。ただし、切手が主役の作品ですので、地図や図は、切手や郵便物より目立たないようにする必要があります。

Q32 :

作品づくりがうまくなるためには、どうしたらよいですか？

A32 :

JAPEXに出品されている作品を、たくさん見ることが一番のちかみちです。JAPEXの会場で出品した人からもお話を聞けるかもしれません。

また、出品したら、審査員(しんさいん)の人からお話を聞くのも大変よい方法です。えんりょなく質問してみましょう。また、切手展に出品している大人や、高い賞をもらっているお友達がいる場合は、そういう人に聞いてみるとよいでしょう。

まわりに、お話を聞ける人がいないときは、自分の作品をコピーして、以下のあて先に送ってみてください。審査員がコピーに赤字で、直した方がよいところや良いところを書いて返送します。これらは無料ですので、きがるに利用してください。

※作品のコピーのあて先

171-0031

東京都豊島区目白 1-4-23

日本郵趣協会(にほんゆうしゅきょうかい)

出品(しゅっぴん)コンサルティング係

6 文献クラス

Q33 :

JAPEXの文献クラスは国際切手展とどのような関係でしょうか？

A33 :

文献クラスは出品資格の条件において、国際切手展との関係はありません。国内展に応募して一定以上の得点を受けることを、出品資格としている国際切手展は現時点ではありません。ただし、国際切手展では文献クラスへの応募に関しては、単行本でも、定期刊行物でも、郵趣知識の向上を目的としたものを想定しています。

JAPEXでは、郵趣団体が発行する団体の活動を記録することが第一義的である機関誌においても、郵趣知識の向上というページが含まれていれば、積極的に受け付けています。国際切手展でも機関誌の応募は受け付けますが、審査は郵趣知識の向上に重点をおいています。

Q34 :

支部報や研究会報はどのように審査されるのでしょうか？

A34 :

JAPEXでは、文献クラスの出品物は会場に特別のコーナーを設け、参観者は自由に手に取って閲覧できますので、その出品物を披露し、価値をPRし、コメントを得たり、理解を求めたりするなど、次の出版に繋げる絶好の機会になります。どのような会報を発行すれば、支部・団体の運営に寄与できるかという観点からも情報交換の場であって欲しいと考えています。

このような背景から、JAPEXの文献クラスでは、会報は定例会の報告が的確になされていれば、その内容であっても奨励賞相当とされます。また、郵趣知識の披露と共有化に関する記事が積極的に掲載されていれば、銅賞以上の評価がされます。さらに装丁、ページの印刷の質なども加味されます。専門研究会の場合は、新着切手情報が重要な要素になりますが、各分野の専門知識の披露と共有化の充実度を勘案して審査されます。

Q35 :

文献審査では、装丁とか、構成ページの印刷の質はどのように審査されるのでしょうか？

A35 :

JAPEXでは、文献クラスの出品物は、何よりも各分野の専門知識の披露と共有化が第一の目的と考え、装丁とか、構成ページの印刷の質は、付随した部分と考えています。

この背景には、文献の出版には当然のことながら、コストが伴いますので、可能な範囲でできるだけ多くの支部報などの出版がなされることを強く願うからです。この点は、コレクションの質と同様に展示技術に重きを置かれる他の部門とは異なります。このような背景から、原則として、装丁とか構成ページの印刷の質が、「本の体裁」(配点5点)以外の配点にネガティブに反映されることはありません。

Q36 :

郵趣雑誌及び定期刊行物は、どのような体裁で応募すればよいのでしょうか？

A36 :

郵趣雑誌や定期刊行物は、審査と会場で閲覧に耐える合本であれば充分です。

JAPEXでは、原則として合本の仕様が審査に反映されることはありません。

7 ワンフレーム・クラス

Q37 :

ワンフレーム・クラスの出品物の中には、稀少性が極めて高いマテリアルを厳選して構成されているにもかかわらず、それほど高い評価を受けていない出品物が毎年のようにありますが、なぜ高い評価を受けられないのでしょうか？

A37 :

ワンフレーム・クラスの出品物には、何よりもワンフレーム・クラスに相応しいテーマを選択することが求められます。ワンフレーム・クラスの審査に関するFIP審査基準(括

弧内は審査委員会挿入)では、以下のような出品物はワンフレーム作品としてふさわしくないとしています。

- ・複数フレームの作品からエッセンスを抜粋した出品物
(例：手彫切手のカバー)
- ・大きなシリーズから特定額面を抜き出した出品物
(例：乃木2銭切手)

それでは、どのようなテーマがワンフレーム・クラスの出品物に適しているのでしょうか。ワンフレーム・クラスのFIP審査基準では、次のように記載されています。

- ・ワンフレーム以上に拡大することが困難な狭いテーマを取り扱った出品物
該当するテーマとしては、伝統郵趣(日本)の出品物を例にとると、次のようなテーマなどが想定されます。

- ・「支那」加刷を含む旧高額5円・10円及び新高額5円・10円をまとめた出品物
- ・台湾地方(数字)切手3額面をまとめた出品物
- ・電信切手10額面をまとめた出品物

なお、以上はFIP国際切手展でのワンフレーム・クラスに適用される考え方ですが、ワンフレーム・クラスが設けられたもう一つの目的は、競争切手展に初出品する方でも気軽に参加できるクラスを設けることにあります。また、国際切手展への出品を目指さない場合にはこのFIP審査基準を厳密に適用する必要はなく、運用は各切手展の実情に委ねるとしています。

Q38：

初めて応募をする場合、1フレームでの出品物も認められるそうですが、ワンフレーム・クラスでの出品物と何が違うのですか？

A38：

現在のワンフレーム・クラスでは、ワンフレームにふさわしいテーマで、そのテーマについて16リーフで完成したコレクションであることが求められます。しかし、ワンフレーム・クラスが始まった当初は、研究は浅いがこれから成長していくコレクションの登竜門としての出品物も認められていました。

そこで、これから成長していくコレクションの出品物が増えていくように、ワンフレーム・クラスではなく、他の各クラスへの1フレーム作品も初出品に限り認めることにしました。したがって、ワンフレーム・クラスでは、テーマの適否とコレクションの完成度合が審査されますが、他のクラスへの1フレームで応募する場合は、今後の成長性も加味した審査が行われます。

8 オープン・クラス

Q39：

非郵趣マテリアルは、どんなものでも良いのですか？

A39：

基本的には、非郵趣マテリアルはどのようなものでも良いのですが、具体的には、絵はがき、貨幣、紙幣、プライベート・カード、チラシ、印刷物、写真、新聞の切り抜き、乗車券、マッチの包装などです。

ただし、厚みのあるマテリアル(フレームカバーができなくなる)や砂を糊で貼りつけた材料(砂が剥がれ落ちる)は、

展示できませんので避けてください。また、コピーの多用も避けてください。非郵趣マテリアルは、実物を示すことが基本です。

9 その他クラス

Q40：

その他クラスには、どのような出品物が含まれるのですか？

A40：

基本的には、どのクラスにも含まれない出品物ですが、具体的には、印紙、絵はがき、マキシマム・カード、メータースタンプなどです。印紙やマキシマム・カードは、国際切手展では独立したクラスがありますが、日本国内では、過去にほとんど応募がないため、JAPEXでは特にクラスを設けていません。

また、構成・展開の方法がどのクラスにも含まれない場合には、このクラスに応募してください。例えば「さくら切手カタログ」のその他の切手類をまとめた出品物などです。

もし判断できない場合には、事前指導制度(出品コンサルティング)などを利用して質問してください。